特 別 講 演

アヴェロンの野生児の認知・言語発達

ハーラン・レイン教授 (Harlan Lane)

(米国ノースイースタン大学)

西暦1800年のある日のこと、パリの中心部にあるリュクスサンプール庭園のそばで、ふたりの若い男が出会った。ひとりは、地方出身の25歳になる医師で、名をマルク・ガスパール・イタルといった。彼は中流階級の家庭に育ち、一時は銀行に勤めたこともあったが、兵役を免れるために、軍の病院で働き、その後独学で医師となった。その数年後、彼はツーロンの町を去り、新しい魅力に満ちたパリへ、医師の職を求めて出てきたのであった。

当時のパリの様子は、大革命の混乱から新しい社会秩序へ移行したと相まって、あらゆる領域において、目をみはるものがあった。知的・社会的エリートが参集する富裕階層の光り輝くサロンを背景にして、演劇、舞踏、音楽、文学など、さまざまな芸術も盛んであった。また、ルソーが社会契約論や教育に関する理論を著したのもこの時期であり、コンディヤックが、言語や感覚、人間の知識起源などに関する論文を著したのもこの時期である。自然科学も急速に進歩していたようで、ワクチンが発見されたのもこの頃と言える。イタルの師であったフィリップ・ピネルは、精神医学的診断に関する最初の著述を公にしたところであったし、すでに市の精神病施設の収容者を鎖から解き放つ命令を下していた。またこの時期、人類学の学会も初めて組織され、アフリカやインドネシアに住む未開人についてのデータが、続々と集められていた。すなわち、ここパリに出てくれば、あらゆる意味において、文明の刺激を受けることができるわけで、イタルがパリにあこがれて出て来たのも不思議なことではなかった。

他方、もうひとりの若者も、パリに出てきたばかりであったという点では、イタルと同様であったが、彼の場合は、自分の意志ではなく、フランスの内務大臣の命令により、パリに出てきたのである。彼は見た感じでは、聾啞で、ひとつのものを注視するということができない状態であった。近づこうとする者には、引っかいたり、かみついたりという行動をとり、絶え間なく、身体を前後にゆすり、時おり、けいれん性の発作が認められた。排泄のコントロールもできないために、非常に不潔

な状態で、衣服を着せられることを嫌うために、ほとんど裸に近い状態であった。身体中には、いくつもの傷があり、とりわけ、首のあたりには、喉を横切る深い傷あとが認められた。年齢は、およそ12歳程度。名前がないために、アヴェロンの野生児と呼ばれていた。この少年は、アヴェロン県の森の中で見つけられたのだが、いろいろなことから判断して、およそ7年間は、森の中で生きていたと推察される。

当然のことながら、この少年には多くの関心が寄せられた。実験としてこのような少年を作り出すことは、もちろん許されないことなのだが、このような特殊な環境で育った少年が、どのような行動をとるのかは、各方面からの注目を浴びることになった。

ふたりの若者——イタルと野生児——の出会いから、後世に語り伝えられる物語が生まれた。その中では、ふたりの主人公が、きわめて特徴的な役割を演じることになる。ひとりは、全く無知な子どもである。知的に、社会的に、道徳的に発達していないばかりか、いかなるコミュニケーション手段も有していない。それだけではなく、見ること、聞くこと、触れること、注意を向けること、憶えること、それに判断することなど、これらすべてのことを、これから教えなければならない。これらの課題を、もうひとりの主人公は、喜んで引き受けることにしたのである。

野生児のこの物語は、ある種の生徒観や教師観、さらには、児童観や教育観を提示しており、それは、西洋の教育に大きなインパクトを与え、今日においてもその影響力は少なからず続いている。野生児を指導していこうとする努力の中で、イタルが生み出したところの“生理学的教育方法論”は、後になって、セガンによって採り入れられ、発達遅滞児の教育に応用されている。セガンは、実際に、イタルの遺した教訓と方法論を、パリにあるふたつの病院で実践し、重度の知恵遅れは治癒不可能な病気である、という考え方を否定した。その後、ヨーロッパやアメリカのいたるところに、知恵遅れの子どものための教育施設が設立されたのである。イタルの考え方や技術が実践に応用されているのは、なに

も障害児教育に限ったことではない。アメリカ全土の幼児教育や小学校低学年のプログラムにおいても、それらは、はっきりと認められる。歴史的にみれば、それは、モンテッソーリというもうひとりの人物に負うところが大きい。モンテッソーリは、彼女の著書の中で、次のようなことを示している。「私は、ローマで2年間、知恵遅れの子どもたちの教育に携わったのだが、その際、セガンの本から得たこと、野生児を相手に行ったイタルの方法論などが、大きな助けになっている。このふたりの偉大な業績のおかげで、私は、さまざまな教材を開発することができた。……私の10年間の仕事は、考えてみれば、イタルとセガンが行ってきた40年間の仕事のまとめであると言えよう。」

さて、野生児とイタルの物語は、後世に大きな影響力をもったのであるが、歴史はこの物語に、どのような評価を与えることになるのだろうか。(1)すぐれた方法論によって、驚くべき成功を収めたものと結論づけるのであろうか。(2)いや逆に、不十分な訓練技術や初期の学習の誤りのために、時間や努力の割には効果があがらなかった例としてしまうのであろうか。さらには、(3)（もうひとつの解釈として）教師の良し悪しとは関係なく、この物語の生徒（野生児）は、器質的な障害をもっているために、乏しい反応しか示さなかったものと結論するのであろうか。今1度、イタルと野生児の物語を思い起こすとともに、それらの評価について考えてみようと思う。

フランスの最初の精神科医であったピネルは、人類学会といえる人間観察家協会から依頼を受けて、この野生児を診断することになった。その結果は、治癒不可能な重度の精神薄弱ということであった。その論理自体は明快である。この少年には、視線が定まらない、聴覚の感覚が乏しい、運動の協応能力が乏しいなど、正常の範囲を逸脱した行動が認められる。突然に笑い出したり、発作も認められ、情緒的に不安定で、学習できるような状態ではない。さらに、口もきけない。このような特徴は、ピネルがいつも見ている精神病院に収容されている、治癒不可能な重度の精神薄弱者の行動特徴そのものである。したがって、この野生児も治癒不可能な重度の精神薄弱児だという3段階論法である。

しかし、イタルは、全く違った考え方をしていた。すなわち、そうではなく、単に、野生での長い生活が、その少年を今の状態にしたのだと考えていた。ヴィクトール（イタルはこの少年にそう名づけた）が、知的に遅れているように思われるのは、彼の生育歴によるものであるとした。このイタルの考えを支持するものとして、ヴィクトールの知能、感覚の弁別能力、運動の協応

などを示す多くの観察記録が残されている。彼が捕えられた直後の様子を具体的に紹介してみよう。

ロデーズというところに居たときの話である。彼はもっぱら豆の皮をむく作業に熱心であった。その技術と鑑別力は人並みのものではなく、すごいやさで、中身の豆とさを左右それぞれに積み上げていった。良質の豆は鍋に入れ、カビがはえたり、ひどく汚れたものは取り除く、万一、豆粒がこぼれたりすると、それを目で追いかけて、拾って他のものと一緒にした。仕事が終わると、鍋を持ち上げて水を注ぎ、火のところへ持って行く。

このようなエピソードだけからでも、ヴィクトールが捕えられた直後にもっていた、さまざまな能力は推察できるが、もうひとつのエピソードを紹介しよう。ある日、ヴィクトールの居るところに、ひとりの客がとおされ、そこで食事をした。その客は、自分の大きなソーセージを少し切って、彼に見せ、近づいてくるように合図した。彼はそれに応えて近づき、すごい速さで、左手でその差し出された一切のソーセージを、そして同時に、右手で残りの大きなソーセージをつかみ取った。

これらの事実からも、重度の精神薄弱児であるとはとても考えられない。そのことは、寒さの厳しい森の中で、動物の攻撃から身を守り、食べものを自分の力で取って、7年間も生きのびたという事実からも明らかである。したがって、この少年が、器質的な障害をもった生得的な重度の精神薄弱児であるという解釈は否定しなければならない。

それでは、このイタルとヴィクトールの話の意義は、主として、教師イタルの指導技術に関するものであろうか。これからのところでは、ヴィクトールとイタルの具体的ななかかわりについて話を進めていくことにする。

イタルは長時間にわたる観察から、この少年には、知的な側面で何が欠けているかを明らかにしようとし、とりわけ、感覚面についての未発達に言及している。初期の行動観察からは、次のようなことが示されている。ヴィクトールは、温度に無感覚で、寒いときでも服を着たがらなかったし、火の中に手を突っこんだりした。また、絵の中の物や鏡に映った像にも、同じように手を伸ばしてつかもうとした。けむりを吸っても、くしゃみをしなかったし、涙を流すこともなかった。大きな音にも反応を示さなかった。食べられる物かどうかを判断するのも、視覚でなく嗅覚にたよった。イタルは、これらの観察事実から、文化的な生活を経験しない場合には、あらゆる感覚の感受性も未発達のままになる場合があると結論づけている。そして、ヴィクトールの感受性を強い刺激によって、よびますため、イタルは、彼を高

い温度の風呂に入れることなどを試みた。また、服を着るようにさせ、ベッドで寝かせ、家の中を暖かくした。こうした処置を数か月続けることにより、かなりの感覚機能が目覚めたように思われる。

イタルの巧妙な指導方法は、書きことばの指導の導入部分でみることができる。それは、コンディヤックの経験主義の仮説の実験的検証ともいうべきものであるのだが、ヴィクトールは、それまでの訓練で、書かれたことばの命令に従うことができるようになっていく。まず、イタルは、簡単な動作の模倣を誘発することから始めた。すなわち、イタルと同時に、腕をあげる、足を前に出す、座る、立ち上がる、手を握る、手をひらくなどの、同じ動作をするようにさせる。これらのことを単純なものから、複雑なものへと進めていく。次に、ペンの代わりに、長い棒を握らせ、やはり、イタルと同じように動かすことをヴィクトールに求める。長い棒を使用したのは、少しの手の動きでも、大きな動きとなり模倣しやすくするためであった。このような予備練習をした後で、イタルとヴィクトールは、それぞれ手にチョークを持ち、黒板に向かい、手を同じ高さの位置においた。イタルが、下に向けて手をゆっくりおろすと、ヴィクトールも同じようにゆっくりおろす。そのときには、ヴィクトールは、イタルの線と自分の線の両方に注意を払い、まるで何度も比較照合しているようであった。そして完全に平行な2本の線分が黒板に書けたのであった。

もちろん、これ以前には、すでに多くの訓練の時間が費やされているのであるが、いたるところに、指導方法の工夫が見られる。

〔途中、十数枚のスライドを用いて、イタルの指導方法を具体的に説明する。〕

イタルは、このように、複雑な課題をいくつかの段階に分け、小さなステップでゴールに近づくように課題を設定する方法も、心得ていた。しかも、それぞれの段階での行動をチェックし、その進捗の分析も行っていた。彼は、心理学でいうところの、**回避条件づけ**や**般化模倣**、**標準刺激との比較照合**、**段階的接近法**など、**行動主義的な技法**をうまく用いていたと言える。また、**刺激統制の分析**も怠らなかった。たとえ、望みどおりの行動が、ヴィクトールから得られたとしても、必ずしも、それで良しとはしなかった。もうひとつのエピソードを紹介していく中で、その考え方に触れてみよう。イタルは次のように報告している。

「ヴィクトールは、……どんなにミルクが好きでも、そ

の好物の名前が出されたのは（定められたとおりに綴られたのは）、習慣的にミルクを飲む時間や、まさに目の前にミルクが出される瞬間に限られていた。……私は、朝食の時間をわざと遅らせ、彼が欲求を表現するのを待ったが、それは失敗に終わった。“lait（ミルク）”という単語が示されたのは、コップが出された後でした。そこで、もうひとつのテストを行った。それは、ミルクの入ったコップを取り上げて、棚の中にしまってしまうというものであった。もし、“lait”という単語がヴィクトールにとって、はっきりした物のサインであり、かつ、それが欲しいという表現であるのなら、突然、取り上げられるという状況にあえば、その要求は持続し、間違いなく、その単語が産出されるはずである。ところが、実際はそうはならなかった。このことから、私は、生徒（ヴィクトール）がミルクを表す単語を書いたのは、彼の欲求を表現したものではなく、単に、食欲を満足させる前に機械的に行った、一種の準備運動のようなのだと結論づけた。そこで、もう1度最初からやり直さねばならないと考えた。生徒に理解されていないのは、私の方に問題があるのだと確信し、私は勇気をもって取りかかった。……“lait”という単語はわれわれにとっては、単純なサインであっても、ヴィクトールにとっては、ミルクその物であると同時に、それを入れている容器であったり、それを対象とする欲求を示していたり、というように、混乱されて用いられる可能性があったようだ。」

とりわけ、教師イタルが、「生徒に理解されないのは、私の方に問題があるのだ」としているところが印象的であるが、このような信念と相まって、5年間のヴィクトールに対する指導の結果は、かなりの成果が得られたと言ってよいだろう。まず最初に、それぞれの感覚の改善が、知的能力の発達に寄与したこと、シンボルの知識を獲得して、周囲の人々との関係を拡げることができたこと、さらに、道徳的な発達を示すようになるなど、最初のヴィクトールの様子とは、大きな隔たりがあることは言うまでもない。優秀な教師イタルは、多くの人たちが見込みのない仕事だと感じていたことを、見事にやっけてのけたようにも思える。

さて、200年近くも経過してから考えるのであるが、イタルの指導技術には、何も欠点がないと言えるだろうか。たとえば、イタルは、初期において、ヴィクトールの行動をコントロールするのに、非常に効果的に思われた報酬（食べ物）を系統的に使用しなかった。イタルは、全体としての出来事に、罰や報酬を与えたようだが、小さなステップにおいて、それらを使用することはなかったようだ。

次に、イタルの弟子であるセガンも批判しているこ

となのだが、感覚訓練を強調するあまりに、運動訓練がおろそかになっていたことがあげられる。また、事物の特徴や用途によって刺激を選択するのではなく、名前によって刺激を選択させたために、概念形成においては、必要以上の混乱を招くことになった。さらに、イタルの最も重大な誤りと考えられることであるが、彼は、ヴィクトールがすでに身につけていた知識や、教授場面以外で示していたヴィクトールの力を利用しようとしなかった点があげられる。たとえば、イタルは、初めから、この少年は口がきけないとあきらめていたようだが、ヴィクトールは、学校の外では、ミルクや水、それに出会った若い女性などの名前を、実際に発声しているのである。また、ヴィクトールは、ジェスチャーを用いることがあったが、イタルは、それに気づいていないようである。どうして、彼に手話言語を教えなかったのかという点も非常に残念に思われる。

イタルは、コンディヤックを信奉するあまりに、何も知らない白紙の生徒に、すべてのことを教師が教えるという考え方に徹していたようである。しかし、自然な自由な場面での子どもの行動を尊重するという姿勢が欠けていたことは否定できない。野生児でさえ、いや、この野生児こそ、創造的で、自発的で適応性豊かな能力をもっていたと言える。

イタルの野生児の指導から、モンテッソーリの「子どもの家」までに、ほぼ1世紀が経過した。近代教育におけるこの流れには、コンディヤック、ピネル、レペ、そしてシカールなどの功績も認めねばならない。すなわち、1800年の夏、パリのふたりの若者に、哲学、医学、言語学が合流したのである。イタルは、野生児の訓練を皮切りに、教材の開発、問題行動の矯正を手がけた。彼は、世界で最初のことばと聞こえの専門家であり、耳鼻咽喉科学の創始者、障害児教育の父であると言ってよいだろう。

感覚訓練は、彼の弟子セガンにより、より発展させられ、さらに、セガンは、世界中の障害児教育の確立に貢献した。その後に登場したモンテッソーリは、イタルの用いたプログラムを、幼児期の教育にまで押し上げ、学習者の年齢によらず適用できることを示し、教育の概念そのものを改めさせた。われわれの社会は、この発展的な体系が与えたものを、徹底して吸収してしまっているのかも知れない。

Harlan Lane (Professor of Northeastern University, 日本学術振興会外国人招へい研究者)

(文責 大阪教育大学 井上智義)